

ある。情報モラル教育では、これらの力を高めることが重要であり、ERICA を情報モラル学習に応用することの意義がそこにある。

表1 学年ごとの実践数

学年	1年	2年	3年	全学年	学年合同	指定なし
実践数	23	11	6	2	1	2

表2 教科等の実践数

教科等	実践数	教科等	実践数
保健体育	1	特別活動	4
技術	13	学級活動	1
美術	1	短学活	1
道徳	15	活動全般	1
総合的な学習	8	指定なし	1

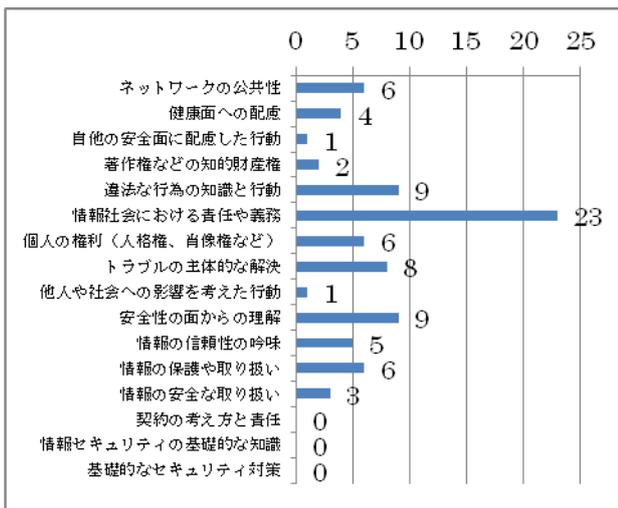


図2 指導事項による実践数

表3 学習形態による実践数

学習形態	講義・解説	話し合い	(擬似)体験学習
実践数	32	31	15

表4 教材による実践数

教材	実践数
ネット上の教材	26
ビデオ教材	2
書籍等	3
自作教材	2
その他	3

4. 研究計画

4.1 研究の仮説

中学校での情報モラルを高める学習において、ERICA を活用して生徒の善悪の判断の標準偏差を視覚化すれば、論議すべき動画の場面が明確になり、情報モラルを高めることができるであろうと考える。

4.2 実験手法

被験者は福岡県の公立中学校に通う27名の中学3

年生とする。実験は国語科で行い、教材は阿濱が作成する動画及び浅羽、斐品、三池が作成するERICA の情報モラル学習用コンテンツとする。

4.3 実験の流れ

実験はA群とB群において、以下の手順で行う。
A群：情報モラルアンケート1→動画を使用した情報モラルの学習→情報モラルアンケート2→感性評価システムを使用した情報モラルの学習→情報モラルアンケート3
B群：情報モラルアンケート1→感性評価システムを使用した情報モラルの学習→情報モラルアンケート2→動画を使用した情報モラルの学習→情報モラルアンケート3

4.4 評価方法

- ①情報モラルアンケートの比較によって、情報モラルの変化を検証する。
- ②生徒の発言を多変量解析等で分析することによって、情報モラルの変化の過程を明らかにする。

5. おわりに

ERICA を活用した情報モラル学習は、話し合いの場面が、生徒の入力結果の標準偏差によって決定されることになり、教師の発問によって話し合いの場面が決定されていた従来の学習とは、その点で異なる。ERICA の活用によって得られるグループ・ダイナミクスによって、生徒の情報モラルが高まり、定着することが期待される。

謝辞

本研究は、平成24年度科学技術研究費補助金を受けています(課題番号24910008)。独立行政法人日本学術振興会に心からお礼申し上げます。

参考文献

- (1) 文部科学省：“中学校学習指導要領”。
- (2) 国立教育政策研究所：“情報モラル教育実践ガイド”、文部科学省、pp1(2011)
文部科学省、“情報教育の現状と課題、改善の方向性(検討素案)”。
- (3) 浅羽修丈、斐品正照：“モニタージュ効果をねらった映像作品における視聴者の時系列的感性変化の調査 - SD法とERICAシステムを用いた手法の比較”、教育システム情報学会研究報告、Vol.23、No.6、pp146-153、(2009)
- (4) 浅羽修丈、斐品正照、豊瀬仁須、三池克明：“中学校国語科の詩の朗読場面における時系列的な心情変化グラフの教育活用に関する実践報告”、情報コミュニケーション学会第8回全国大会発表論文誌、pp92-93(2011)
- (5) 「情報モラル教育」指導手法等検討委員会：“やってみよう情報モラル教育”
<http://kayoo.info/moral-guidebook-2007/index.html>
- (6) 国立教育政策研究所：“情報モラル教育実践ガイド”、文部科学省、pp11-14(2011)